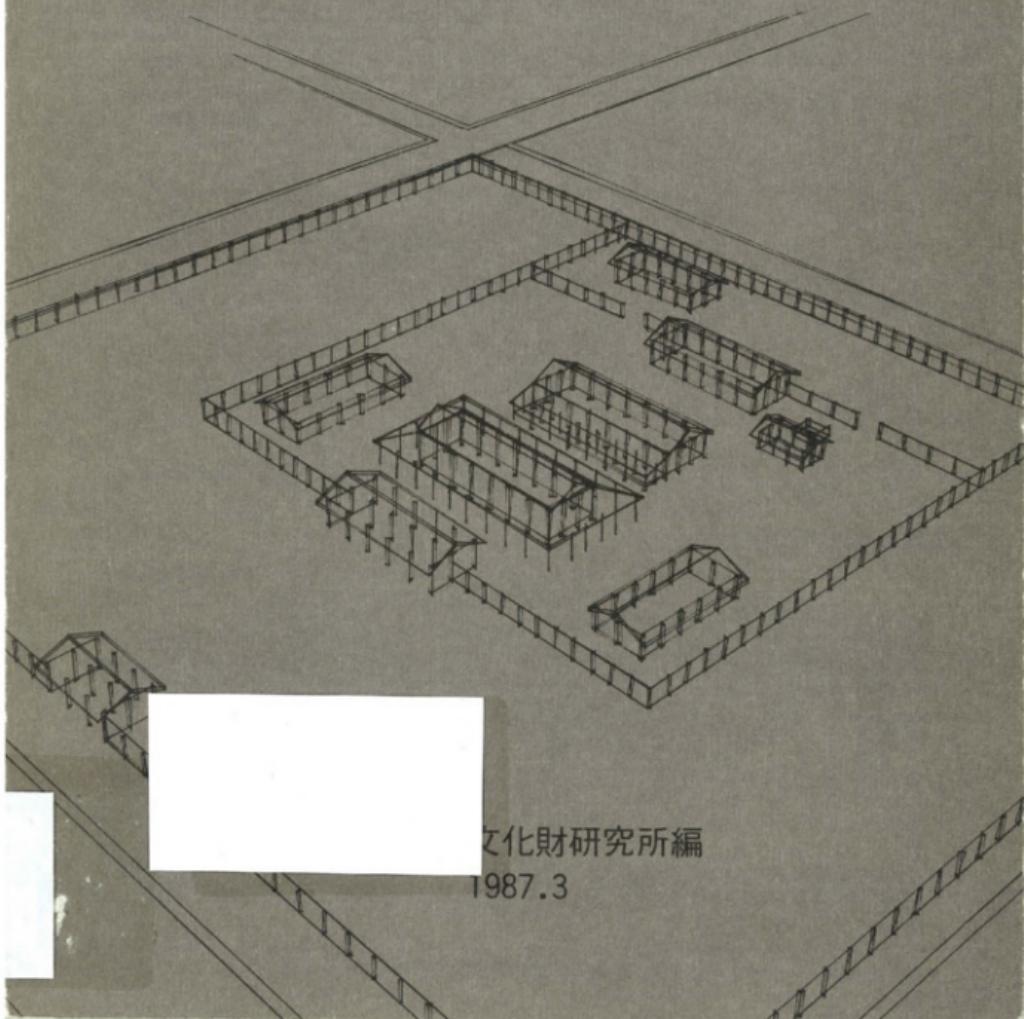


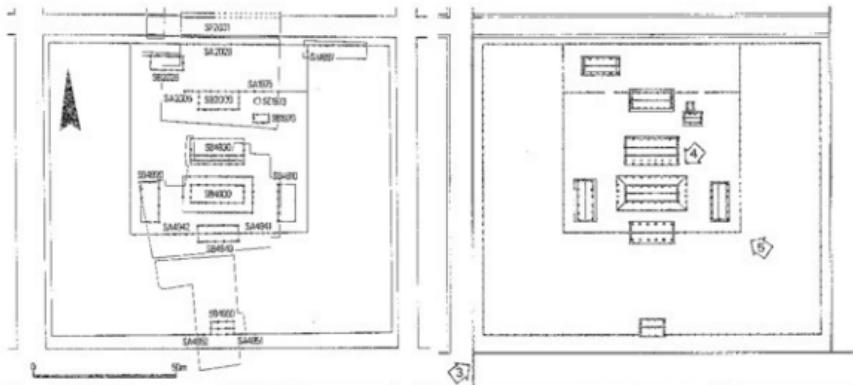
藤原京右京七条一坊西南坪

発掘調査報告



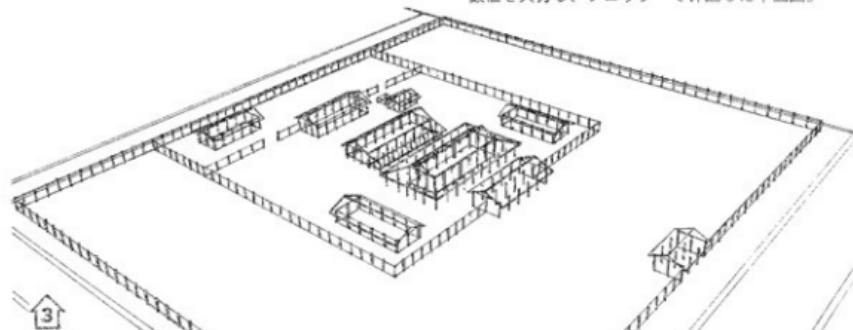
文化財研究所編

1987.3

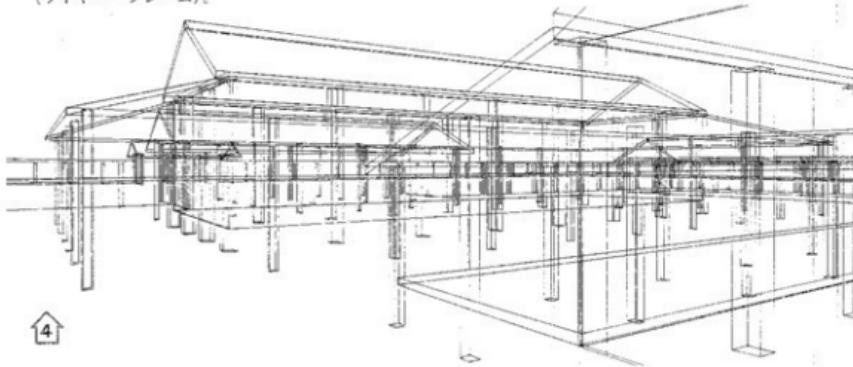


1 右京七条一坊西南坪の遺構平面図。

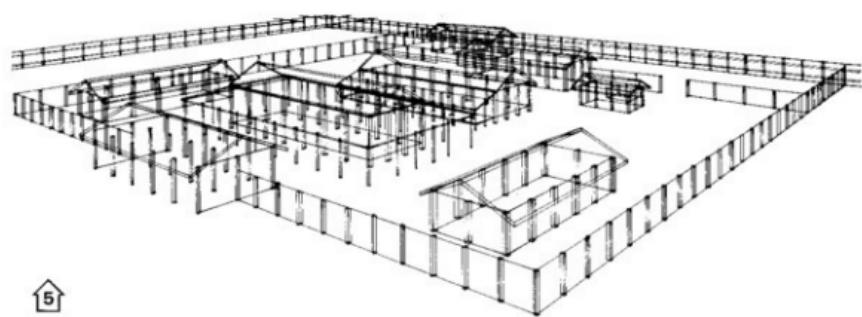
2 コンピューターに柱・壁・屋根等の3次元の座標数値を入力し、プロッターで作図した平面図。



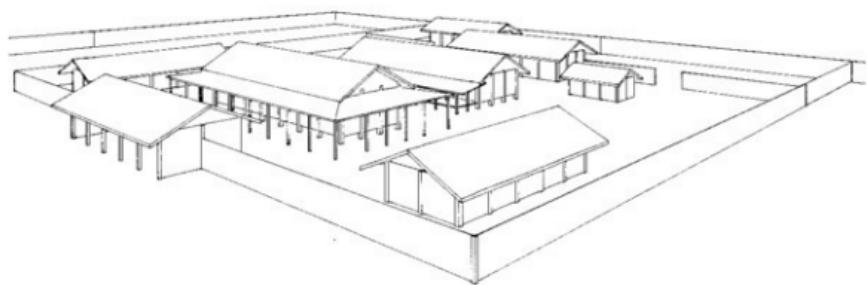
3 数値を一旦入力すれば、あらゆる角度からの構図が可能。これは南西上空からみた西南坪全体の透視図(ワイヤー・フレーム)。



4 建物の中、あるいは地上に立つ人間の視角からの図も得られる。これは後殿の東から南北方向をみた透視図。



5 建物の配置や構造がもっともわかりやすい構図を選ぶ。これは東南からみた内郭の建物群の透視図。



6 上図とほぼ同じ角度からみた内郭建物群の陰面消去図。不用な線をコンピューターが消去してくれる。



7 柱や屋根、塀などの細部を建築史の知識に基いて加筆修正した原図。これをもとに復原想像図を作成した。なお使用した機器は、16ビットコンピューター、建築バース作成ソフト、デジタイザー、XYプロッターである。



西南坪宅地復原想像圖

序

奈良国立文化財研究所が藤原宮跡の発掘調査をはじめてから今年で18年となった。日本古文化研究所の戦前の調査、および国道165号バイパス建設計画とともに奈良県教育委員会の調査成果を総合すると、大極殿や朝堂院、宮の外郭施設や官衙地域の解明はもとより、藤原京内の条坊制も次第に明らかになりつつある。しかし、京内の従来の調査は、おもに道路建設事業や、比較的小規模な宅地開発などにともなうものであったため、大路、小路の割付けや幅員、あるいは坪内の状況の一部を確認するにとどまっていたのが現状である。

その中で1976年におこなわれた藤原宮の第19次調査では、右京七条一坊西南坪の北辺部を調査して、坪の中軸線上に位置する掘立柱建物や坪内を仕切る塀を検出し、一坪全体を敷地とする宅地の存在が推定されていたのである。今回はその第19次調査区の南、坪の中心部を含む広い範囲を調査することになった。その結果、予想のとおり正殿を坪の中心に置き、東西脇殿や後殿を規則的に配し、正殿の前に中門、さらに前に南門をもつ建物群の構成が明らかとなり、一坪全体を敷地とした高位の官人、または貴族の邸宅であったと想定されるに至ったのである。このように宅地内の状況をほぼ把握できた調査は今回がはじめてで、藤原京の調査研究のうえに重要な成果をあげたと言うことができよう。

なお、今回の発掘調査は、橿原市の住宅建設にともなう事前調査で、藤原京右京七条一坊発掘調査会が橿原市から委託を受け、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が調査を担当した。この調査の実施にあたり、地元住民の方々から多くの御協力をいただいたことに厚く感謝する次第である。

1987年3月

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

岡田英男

目 次

I 序 章

	頁
1 調査の経緯	1
2 位置	1
3 既往の調査	1

II 遺 跡

1 調査	7
2 遺構	8

III 遺 物

1 土器・土製品・その他	13
2 瓦	20
3 柱根・木製品	20

IV まとめ

1 条坊復原と西南坪の規模	22
2 内郭と各外郭の規模	23
3 内郭の建物配置	24
4 西南坪の遺構の性格	24

図 版

表紙	西南坪建物透視図	9	東脇殿SB4910
見返し	コンピューター・グラフィックス を利用した建物俯瞰図の作成過程	10	西脇殿SB4920
巻首図版	西南坪宅地復原想像図	11	東西軒SA4942
1	調査地周辺の現状	12	南門SB4950
2	北区航空写真	13	南区西半全景
3	北区全景	14	正殿SB4900柱掘形
4	北区全景	15	西脇殿SB4920柱掘形
5	北区全景	16	後殿SB4930柱掘形
6	中門SB4940・正殿SB4900	17	土坑SK4935
7	正殿SB4900	18	出土土器
8	後殿SB4930	19	出土遺物

挿 図

	頁		頁	
第1図	1908年(明治41)の調査地周辺	1	第8図 検出遺構実測図	11
第2図	調査地周辺の地形と条坊	2	第9図 出土土器実測図Ⅰ	15
第3図	第45-2次調査検出の横穴墓	3	第10図 出土土器実測図Ⅱ	17
第4図	第19次調査区遺構配置図	5	第11図 出土土器実測図Ⅲ	18
第5図	第19次調査区南半全景と今回調査地	5	第12図 出土遺物実測図	19
第6図	藤原京条坊復原模式図	6	第13図 出土柱根・木製品実測図	21
第7図	北区西壁土層図	7	第14図 西南坪占地概念図	23

表

第1表 第19次調査 建物・塙規模一覧	4	第2表 建物・塙規模一覧	12
---------------------	---	--------------	----

例　　言

- 1 本書は奈良国立文化財研究所が、藤原京石京七条一坊発掘調査会（代表、松井住春）の委嘱を受けて、橿原市上飛騨町73-1他において実施した発掘調査の報告である。
- 2 調査は橿原市の小集落地区改良事業にともなう住宅建設の事前調査として実施した。調査は北区と南区に分けておこない、調査期間は北区が1986年6月27日～8月12日、南区が8月20日～10月4日で、調査面積は2,087m²である。
- 3 調査は当研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部（部長、岡田英男）が担当した。調査員は、北区が木下正史、菅原正明、大脇潔、西口寿生、南区が山本忠尚、川越俊一、土肥孝、岩本正二の8名で、補助員として高野学、高橋公一が参加し、大江真人、網仲也、山本義孝、藤本啓二が協力した。
- 4 調査にあたっては、奈良県教育委員会と橿原市教育委員会の協力を得た。
- 5 本書の作成は、部長岡田英男の指導のもとに調査部員全員があたり、各執筆者の討議を経たものである。執筆者は、I 木下正史、II 大脇潔・土肥孝、III-1 西口寿生、III-2 山本忠尚、III-3 菅原正明、IV 大脇潔である。なお、コンピューター・グラフィックスによる建物俯瞰図は、井上直夫と清水真一が原図を作成し、星野京に復原想像図の補筆・彩色を依頼した。
- 6 遺構・遺物の写真は、井上直夫が担当した。
- 7 本書の編集は、大脇潔が担当した。

1 序 章

1 調査の経緯

1985年8月7日、橿原市は同市上飛騨町73-1番地ほかについて、小集落地区改良事業にともなう住宅建設工事に原因する事前発掘調査の通知書を文化庁に提出した。造成工事の着手時期は同年11月の予定であったが、申請地が市営日高山団地建替工事にともなう残土置場にあてられたこともあり、発掘調査着手の時期が未定のまま8カ月が経過した。ところが1986年4月に至り、当事業を担当する橿原市飛騨地区改良事務所は、年度内の早期着手を決定した。そこで、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部等で協議を重ねた結果、当調査部が発掘調査を担当することになったのである。

しかし、調査部では1986年度の発掘計画を決定した直後で、すでに予定どおり調査が進行中であった。そのため取扱いは困難を極めたのであるが、年度計画の一部修正をはかりつつ6月に発掘に着手することとした。調査は、藤原京右京七条一坊発掘調査会（代表、松井住春）と橿原市長との間で発掘調査の委託契約が締結され、発掘調査会の委嘱を受けた調査部が実施した。

2 位 置

調査地は藤原宮の南面中門から南西へ300m、藤原宮の南に横たわる日高山丘陵の西麓から西へ約70mの位置にある。一帯は南東から北西へ向ってゆるやかに傾斜する地形であり、調査地の南方100mのところには飛鳥川が南東から北西へ流れしており、この場所は飛鳥川右岸の低地に位置している（第1図）。

盛土以前の地形は条里で区画された水田であり、条里の呼称でいえば、高市郡路東二十七条二里十一坪の中央部にあたる。また岸後男氏による藤原京の条坊制復原説によれば、右京七条一坊の西南坪にあたり、奈良国立文化財研究所が設定した遺跡の地区割りでは、6AWH-P・Q地区に含まれる。

3 既往の調査

日高山の周辺では、1975年以来、橿原市が市営住宅の建設や小集落地区改良事業にともなう宅地造成工事等の事業を進め、当調査部では、それらの工事にともなう事前調査を数

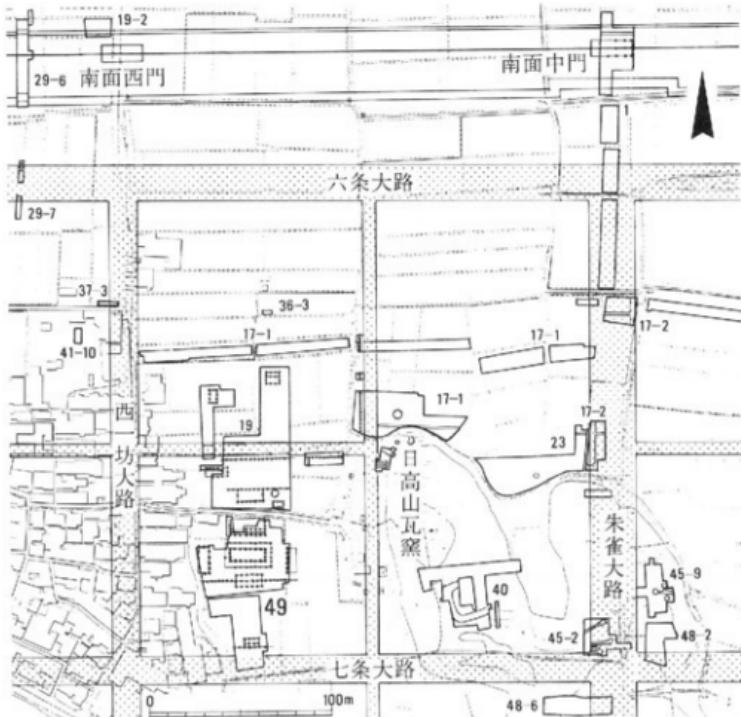


第1図 1908年(明治41)の調査地周辺

次にわたり実施してきた。それらの発掘成果については『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』6・7・14~16等で報告してある。おもな成果は以下のとおりである(第2図)。

まず、朱雀大路と七条大路を確認し、藤原京条坊道路の実態の解明が大きく前進した点があげられる。朱雀大路は、宮南面中門の南150mの地点での発掘成果によると、路面幅19m、東西両側溝の幅5mで、側溝心々間の距離は24mである。他の大路の側溝心々間の距離が9mと15mであるのにくらべ、より幅広い京中央大路としての性格をうかがえた(第17-2・23次調査)。

この地点の南にひかえた日高山丘陵については、市営日高山团地建設工事にともなう事前調査を何度かおこなっているが、丘陵頂部は近年における削平が著しく、朱雀大路の遺構そのものを確認するには至っていない。しかし、朱雀大路の推定位置では、日高山の北から湾入する谷を埋め立てた大規模な整地の跡を確認しており、これは朱雀大路の敷設にともなう整地地業である可能性の大きいことが判明している(第45-2・48-6次調査)。



第2図 調査地周辺の地形と条坊 数字は調査次数

坊内の利用状況に関しては、坊を東西に二分する南北掘立柱塀と、この塀以西の場所で七条条間路を検出したことによって、坊の西半部が西北坪と西南坪との二区画に分けられていたことが判明した（第17-1・19次調査）。これに対して、東半部の東北坪と東南坪とでは、七条条間路など、坪の間を区画する施設はない。これは二つの坪を一体で利用したためと理解することもできるが、日高山丘陵が東南坪のはば全域を占めていることとも大きく関連している。

日高山丘陵では、その北斜面から西斜面にかけて、藤原宮所用の瓦を焼いた瓦窯が計4基確認されている。登窯の1号窯と平窯の2号窯とがならんで検出されており、二種の構造の窯が並存することが知られている¹。一方、丘陵のすぐ北に続く低地、すなわち、東北坪の南部では、鋳銅関係の炉址や井戸などが検出されている（第17-1次調査）。東北坪と東南坪は藤原宮の南に接する京内でも一等地にあたるが、ここには、造瓦工房を含めて藤原宮の造営工事に直接関わる様々な工房が設けられていた可能性が強いのである。

また、日高山丘陵の北端から、藤原宮の南面中門に至る一帯では多量の円筒埴輪や形象埴輪が発見されており、これは、京・宮の造営に際して、日高山丘陵上にあった古墳を削平し、その埴丘の盛土などを使って、一帯を整地したことによるものと考えられてきた。そして1984年には、舌状にのびる二つの尾根のうち、西側の尾根の頂部で、埴丘をほぼ削平された5世紀中葉造営の方墳が発見されて、この想定の正しいことが裏づけられたのである（第40次調査）。そのほか、6世紀前半代の埴輪や6世紀後半の須恵器なども出土しており、なお多くの古墳が藤原京・宮の造営工事によって消滅した状況がうかがわれる。

さらにまた、最近では東側尾根の西斜面、つまり、二つの尾根を分ける谷の奥で6世紀後半の横穴墓4基（第45-2次調査）、東側尾根の頂部に近い東斜面で7世紀前半から中葉にかけての横穴墓4基を発見する成果があった（第45-9・48-2次調査）。

西斜面で検出した横穴墓群は、前述した朱雀大路の造成地業の直下にあって、その造成工事に着手する直前に内部を発き、遺体と副葬品を取り除くという注目すべき事実が判明した（第3図）。これは藤原京の造営工事の際に見つかった横穴墓を改葬した跡と理解され、それはまさに『日本書紀』持統7年（693）2月10日条にみえる「造京司衣縫王等に詔して、掘せる戸を收めしむ」の命令が忠実に実行されたことを示すものといえよう。



第3図 第45-2次調査検出の横穴墓 西から

第19次調査では西北坪と西南坪の一部を調査し、藤原京の遺構（B期）と、それに先だつ7世紀後半の遺構（A期）を検出したが、ここでは、今回の調査と密接な関係のある藤原京の遺構について簡単に説明しておく（第1表、第4図）。

西北坪は発掘面積が狭く、第17-1次調査で検出した坪の東限の南北塙SA1855と、小規模な建物SB2035・2040を検出したにとどまる。西南坪は坪中央部の北部を一部発掘した程度であるが、建物群を規則的に配置する坪利用の実態を解明する重要な手がかりが得られている。すなわち、坪の北を七条条間路SF2031に並行して設けた東西塙SA2029によって画し、両面の内部では、坪を東西に二分する中軸線上に建つ6間×3間の大規模な建物SB2000を中心に、周辺に小規模な建物や戸井戸を配置する構成が判明したのである。

また、坪の内部は数条の扉によって、いくつかのブロックに細分されていたとみられる。ことに、前述の大規模建物の北側柱に取りつく東西塙SA1975・2005と、中軸線から東へ31mの位置にある南北塙SA1997によって、坪内は内郭と外郭とに分けられていた可能性がある。このことは西南坪が一体で使われていたことを示唆し、さらにまた、SB2000の南方にあたる坪の中央部に、主要建物群の存在を予想させたのである。

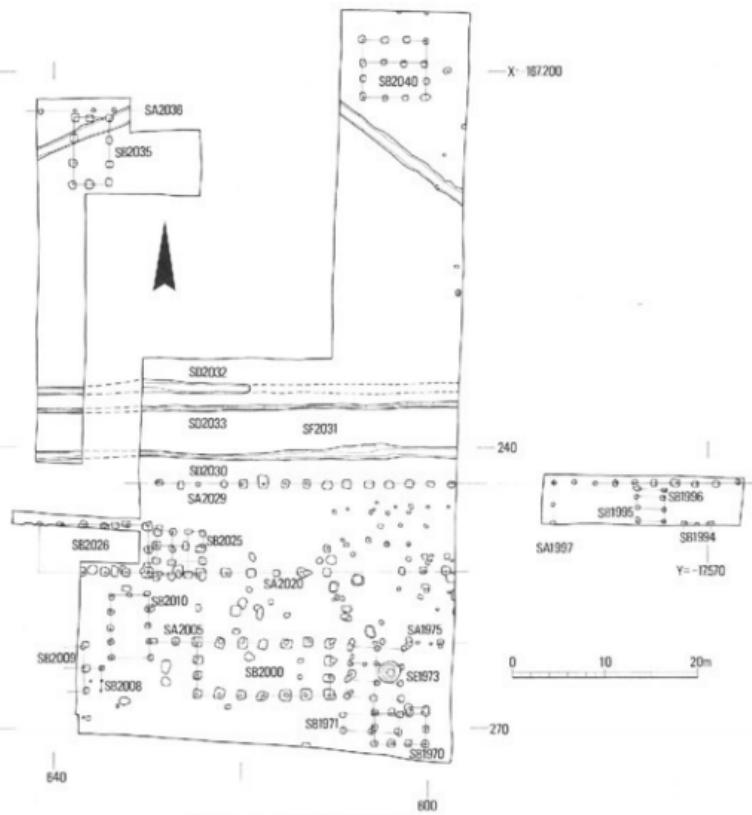
これまでの藤原京内の発掘は、条坊地割の基本計画の解明に重点をおかねばならず、条坊道路に囲まれた坊や坪内の利用状況に関しては、これを明らかにできるほど調査が進んでいないのが実情であった。今回の調査地は、藤原京での坪利用の実態を解明する重要な地域と認識し、その発掘成果を大いに期待したのである。

1 前川善教「橿原市飛騨町日高山瓦窯」「奈良県文化財調査報告書－埋蔵文化財編』第5集、1962。

奈良国立文化財研究所編『藤原京右京七条一坊調査概報』1978。

時期	遺構番号	種類	規模	庇 桁行 m	梁行 m	庇 m	備 考
A期	SB1971	南北棟	5×2	9.0	6.0		純柱 SB1970・SA1975より古
	SB1995	東西棟	1×1	2.9	2.7		
	SB1996	東西棟	1×1	3.0	2.0		SA2029より古
	SB2008	？	？	？	？		
	SB2009	東西棟	？×2	？	4.8		
	SB2010	南北棟	4×2	6.8	4.0		SA2005より古
	SA2020	東西塙	14以上	38.0以上			SB2025・2026より古
	SA2036	東西塙	4以上	8.0以上			西北坪
B1期	SB1970	東西棟	3×2	5.4	3.3		SB1971より新
	SA1975	東西塙	4以上	9.6以上			SB2000の東にとりつく
	SB1994	南北棟	2×2	？	3.0		
	SA1997	南北塙	2以上	4.4以上			SA2029にとりつく
	SB2000	東西棟	6×3	14.4	5.7		
	SA2005	東西塙	2	5.9			SB2000の西にとりつく
	SB2026	東西棟	5×2	11.6	5.0		SA2020より新
	SA2029	東西塙	28以上	62.5以上			
B2期	SB2035	南北棟	3×2	7.2	3.8		西北坪
	SB2040	東西棟	3×2	北 6.9	3.6	2.4	西北坪
	SB2025	東西棟	3×3	5.1	4.5		純柱 SA2020より新

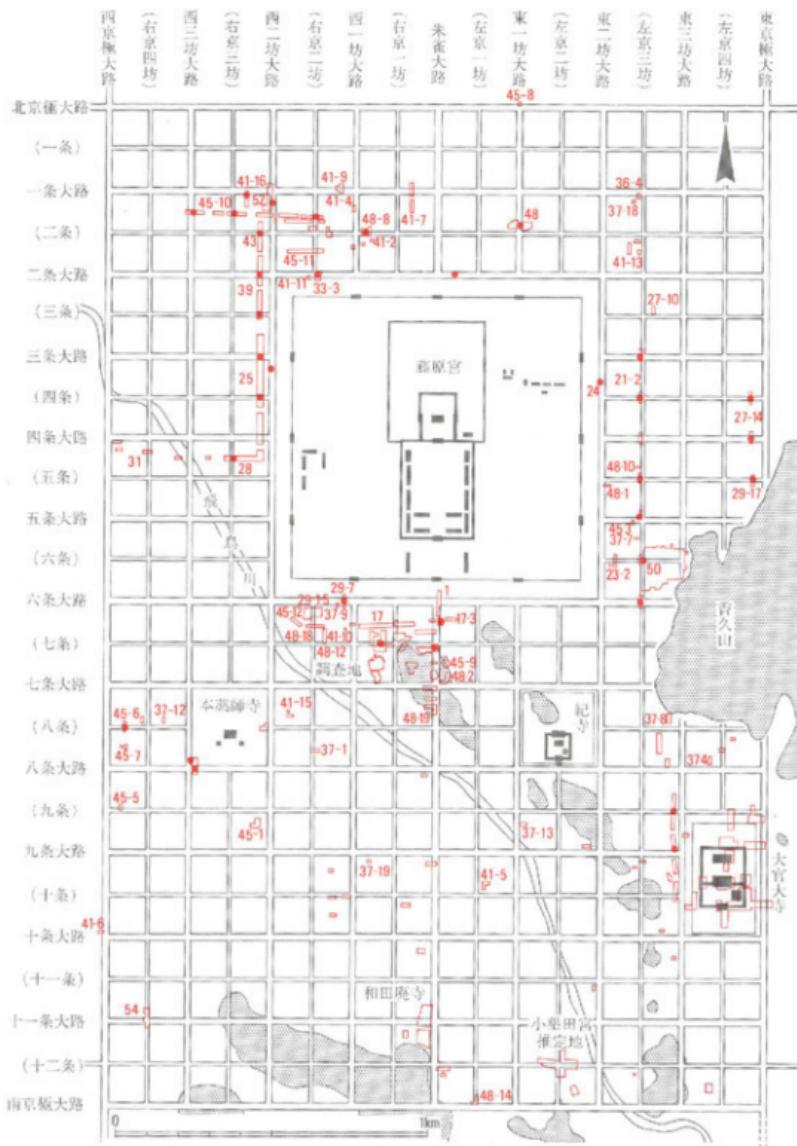
第1表 第19次調査 遺物・塙規模一覧



第4図 第19次調査区査点配置図 1/600



第5図 第19次調査区南半全景と今回調査地 北から



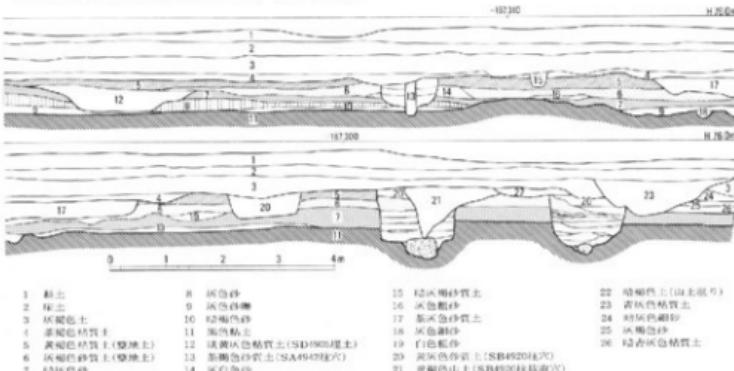
第6図 藤原京条坊復原模式図 数字は調査次数 ●は条坊間連遺構検出地点

II 遺 跡

1 調査

発掘区の設定 調査対象地は、櫻原市上飛騨町73-1・74-1~2・75-1・76-1~3・79-1番地に所在する旧水田である。敷地全体には1m以上の盛土があったが、これを除去して調査を実施した。発掘区は、敷地北半部の形状にあわせて東西約42m、南北約37mの北区をまず設定し、ついで、坪の中軸線にそって東西約27m、南北約40mの南区を鉤の手状に設けた。その後、建物の規模や配置を確認するために、北区では東、北、西の一部を、南区では東の一部を拡張した。その結果、西南坪の中心部を東西約50m、南北約80mにわたって調査したことになる。

層位 調査地の旧地表は北区で標高約75.7mである。層位は、基本的に上から旧水田耕土（厚さ0.2m）、床土層（厚さ0.1m）、灰褐色土層（厚さ0.3m）、灰褐色ないしは黄褐色の砂層と砂礫層の互層からなる地山の順である。この砂層と砂礫層に遺物は含まれておらず、自然流路と思われるが、その下にはかつて沼状の地形であったことを示す黒色粘土層が基盤を形成している。遺構の大部分はこの地山の上面で検出した。北区中央における地山上面の標高は75.1m前後である。しかし、北・南区とも西寄りの約10mの範囲では地山面がやや低く、7世紀前半の土器を含む溝が数条あり、その上を藤原宮期の土器を含む茶褐色砂質土で整地している。この上面で藤原宮期の遺構を検出し、整地土を除去して藤原宮期以前の溝を検出した。また、北区の南寄りには、砂層の上に古墳時代の布留式土器を少量含む暗褐色粘土が一部堆積している。なお、藤原宮期の建物の柱掘形と柱抜取り穴には多量の黄褐色土が含まれており、すでに削平されて土層としては残っていないが、藤原宮期の建物の造営にあたって東の日高山丘陵を削り、その土を盛って大規模な整地がおこなわれたことを示している（第7図）。



第7図 北区西壁上層図

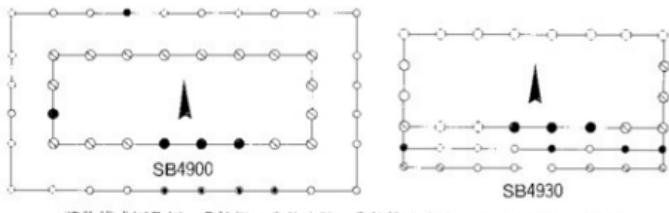
2 遺構 (図版1-17, 第8回)

検出したおもな遺構は、掘立柱建物7棟、掘立柱塀4条、土坑7基、溝8条である。このほかに、東西・南北方向にのびる多数の小溝や、性格不明の小穴がある。このうち小溝は、床土上面から掘りこまれた比較的新しい時期のものから、灰褐色土の下部から掘りこまれたやや古い時期のものがある。いずれも中世以降の耕作に関する遺構と考えられ、今回は図示・記述とともに省略する。検出した遺構は、藤原宮期・藤原宮期以前・藤原宮期以後の3時期に大別されるので、その順序にしたがって記述する。なお、遺構には一連番号を付し、その前に塀SA・建物SB・溝SD・土坑SKなど遺構の種類を示す記号をつけた。

藤原宮期の遺構

SB4900 北区中央部にある大規模な掘立柱東西棟建物。調査区の関係で建物の北西隅を調査できなかったが、桁行7間、梁行3間の身舎四面に庇がとりつく建物に復原できる。身舎の柱間は桁行2.63m等間、梁行は多少ばらつくが2.1m等間である。庇の山は南側が3.3m、その他は3.0mで、柱位置は身舎の柱筋にはほそろえる。身舎の柱掘形はやや不揃いであるが、一辺1.1~1.7m程度の隅丸方形を呈し、截ち割り調査をおこなった掘形では、いずれもひとかえ大の石を据えた礎盤を確認している。柱掘形の深さは現状で0.5~1.0m程度、掘形底の高さは最大で約0.3mの差がある。礎盤も基盤をなす黒色粘土層が軟弱なためか、大部分は掘形底より沈下している。柱は、南側柱列東第3~5柱穴と、西側柱列南第2柱穴を除き、すべて抜き取られているが、柱抜取り穴は東側柱列南第3柱穴以外はいずれも小さく、掘形の外にはのびない。あるいは、地表付近で柱を切断して抜き取ったものかと推定される。庇の柱掘形は一辺が0.5~0.6m程度でいずれも浅く、北庇東第7柱穴には径12cmの柱根が残る。このほかに、南と北庇の柱穴には平行した小柱穴群SX4906・4908がある。とくにSX4906は柱筋もそろい、柱痕跡も残るので、庇の作りかえを示すと考えられるが、明確な柱穴の重複関係が認められず、その先後を決しがたい。ここでは南の庇は、当初、その出が2.8m前後であったものが、3.3mに広げられた可能性を指摘しておく。

SB4910 北区の東端にある掘立柱建物。調査区の関係で西側柱5間分を検出したにすぎないが、後述するSB4920とほぼ対称の位置にあることから、桁行5間、梁行2間の南北棟と推定される。柱間は2.56m等間である。柱掘形は一辺1m前後とやや小さく、これ



もひとかえ程の石を据えて礎盤としているが、柱はすべて西側へ抜き取られている。柱掘形の深さは現状では0.5~0.8m程度であるが、両隅の掘形が深く掘られている。

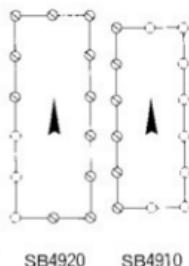
SB4920 北区西端にある掘立柱南北棟建物。調査区との関係で、西側柱列と北側柱列の掘形はその一部を検出したにとどまる。桁行5間、梁行2間に復原でき柱間は桁行2.88m等間、梁行2.7m等間である。柱掘形は一辺1.2~1.5m程の隅丸方形で、截ち割り調査をおこなった掘形のすべてで、ひとかえ程の石を据えた礎盤を検出している。なかでも、東南隅柱穴では、礎盤のまわりに拳大から人頭大の玉石を置いて柱の根固めとし、2柱穴では、礎盤のまわりに拳大の玉石を根石ふうに配した状況を確認している。また、東側柱列南第4柱穴では、山土と基盤の黒色粘土を版築状につき固めた状況が認められるなど、ひときわ丁寧な仕事が目についた。柱掘形の深さは、現状では0.9~1.2m前後と深い。柱の抜き取り方向は一定しない。

SB4930 北区北端にある掘立柱東西棟建物。道路下にある北側柱列を検出していないが、SB4900と柱筋をそろえた桁行7間、梁行3間の身舎の南に庇がとりつく建物に復原できる。身舎の柱間は桁行2.63m等間、梁行は2.2m等間、南庇の出は2.9mである。このほかに、南側柱列から1.5m南に、柱筋をそろえた小柱穴がある。検出した6ヶ所の柱穴のうち、4ヶ所に柱根が遺存しており、他の柱も抜き取った痕跡がないことから推定すると、この小柱は南庇の床東で、南庇は床を張って広縁となっていたと考えられる。身舎の柱掘形は一辺0.8~1.1m、深さ0.5m前後の隅丸方形で、南側柱列東第3~5柱穴を除き柱は抜き取られている。柱根が遺存する柱穴には、いずれも長さ0.5m、幅0.2m、厚さ0.1m程の木製の礎盤が残る。礎盤はいずれも基盤をなす黒色粘土層に沈下している。また、東側柱列南第2柱穴では人頭大の玉石を据えて礎盤としている。庇の柱掘形は一辺0.7m、深さ0.2m程と小さく、柱はすべて抜き取られている。広縁の床東と推定される掘形は径0.4m、深さ0.3mの小さなもので、東第1・2・4・8柱穴に径8~10cmの柱根が残る。

SB4940 SB4900の南にある桁行5間、梁行2間の総柱の東西棟建物。柱間は桁行2.86m等間、梁行3.0m等間である。柱掘形は1辺0.7~1.0m、深さ0.2~0.5mで、柱はすべて抜き取られている。北側柱列東第2柱穴に木製の礎盤が残る。

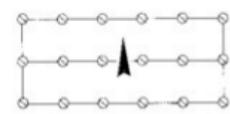
SA4941 SB4940の東妻柱にとりつく掘立柱東西端。6間分を検出し、柱間は1.9~2.4mと多少のばらつきがある。柱掘形は1辺0.9m程であるがいずれも浅く、柱は東へ抜き取られている。

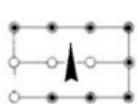
SA4942 SB4940の西妻柱にとりつく掘立柱東西端。8間分を検出し柱間はこれも2.0~2.4mとばらつきがある。柱掘形は一辺1.0m前後であるが、いずれも浅く、柱は抜



SB4920 SB4910

南妻柱穴と西側柱列北第2柱穴





き取られている。柱抜取り穴から推定すると、柱の径は13~18cm程と考えられる。

SB4950 南区の南半部にある桁行3間、梁行2間の純柱東西棟建物。柱間は桁行2.5~2.9mと不揃いであるが梁行は2.5m等間である。柱掘形は一辺0.8~1.0mの不整方形で、削平を受けたためか深さは現状で0.2~0.4mと浅い。なお、棟通りの西第1~3柱穴の掘形はとくに浅い。その他の柱は抜き取られておらず、径0.2mの柱痕跡が残り、柱の底やまわりには拳大から人頭大の玉石を根固めふうに配している。

SA4951・4952 SB4950南側柱筋にとりつく掘立柱東西堀。調査区の関係で、各1間分を検出したにとどまるが、柱間はともに2.6m前後である。柱掘形は一辺0.8m程で、現状での深さ0.2~0.5mである。なお、この堀の南側には七条大路北側溝の存在が予想されたが、南区南半が著しい削平を受けているためか検出できなかった。

SK4970 SB4930の西側にある小規模な土坑。東西0.7m以上、南北0.6m、深さ0.1mで、底に平面梢円形を呈する曲物(0.6×0.35m)の側板がわずかに遺存していた。

藤原宮期以前の遺構

先述したように、北・南区とも西側には7世紀前半の溝が存在し、これらが埋没した後に、藤原宮期の建物の造営にともなう整地土によって上面が覆われ、その上にSB4920とSA4942が建てられている。北区の西南隅の一部と、南区の西半でこの整地土を除去して下層の遺構を検出した。

SD4955 南から北西へやや湾曲しながら流れる斜行溝。北区で分岐して一部は西へ流れ、SD4905となる。幅約2m、深さ0.3mで約35m分を検出したが、南半では拳大から人頭大の玉石で護岸し、底にも敷きつめていた状況が一部残る。溝内から飛鳥Ⅰ~Ⅱ段階の土器が出土。

SD4956 SD4955の西約3mを平行して流れる斜行溝。幅1.8m、深さ0.2mで20m分を検出した。溝内に飛鳥Ⅰ段階の遺物を含む。

SD4957 SD4956を壊して、ほぼ東西方向に流れる斜行溝。斜行溝SD4955より古い。幅0.3~1.0m、深さ0.1mで一部に拳大の玉石を敷く。溝内から飛鳥Ⅰ段階の土器が出土。

SK4901 北区東南隅にある土坑。その一部を検出したのみであるが、東西6m、南北2m以上の規模があり、深さは0.6mである。埋土から飛鳥Ⅲ~Ⅳ段階の土器が出土。

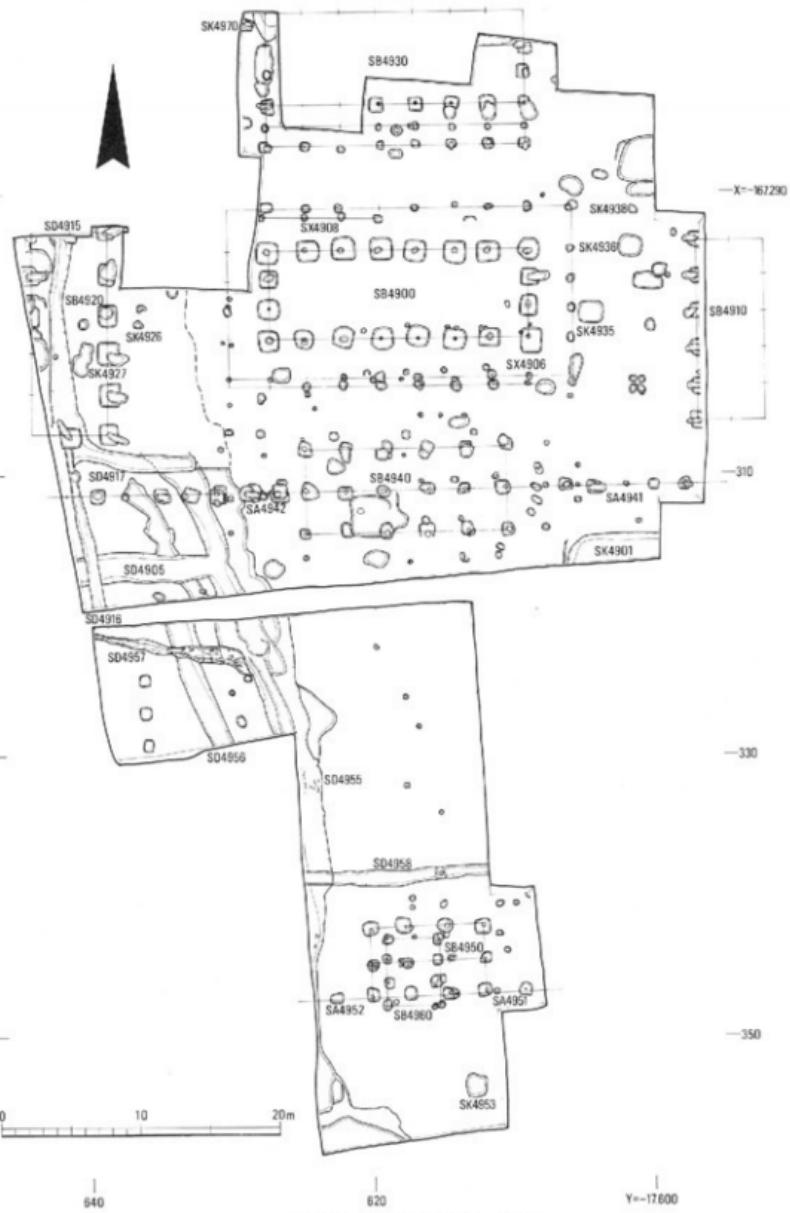
藤原宮期以降の遺構

SB4960 南区の南寄りにある桁行3間、梁行1間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は、桁行1.5~1.7m、梁行3.5mであるが柱筋はそろわない。柱掘形は径0.6m

前後で浅く径0.2m程の柱痕跡が残る。SB4950の柱穴との切りあいはない。

SD4958 SB4960の北3mの位置にある蒸掘りの東西溝。幅0.8~1.0m、深さ0.1mで埋土から10世紀前半の土器が出土している。





第8図 検出遺構実測図 1/400

SD4915・4916 北区西端にある素掘りの南北溝。幅0.9~1.8m、深さ0.5m。南のSD4916と一連の溝で、26m分を検出した。SB4920の柱抜取穴より新しく、SD4917よりは古い。溝内には流水を示す砂屑が堆積している。10世紀末から11世紀初頭の黒色土器と土師器が出土。

SD4917 SD4915に重複する素掘りの斜行溝。幅1.0~1.5m、深さ0.3m前後で人頭大から拳大の玉石を多量に含み、激しい流水があったことを示している。溝内から11世紀初頭の土師器が出土しているが、重複関係からSD4915より新しい。

SK4935 北区東寄りにある東西1.7m、南北1.5m、深さ0.4mの隅丸方形を旱する土坑。埋土から牛の骨や歯とともに、鼻木2個体分が出土。骨の出土状態からみると、埋葬されたものとは考えられない。14世紀後半の土器や陶器の小片が出土している。

SK4936 SK4935の東北にある同規模の土坑。やはり牛の骨と歯とともに鼻木1個体分が出土。これも出土状態は埋葬を示すものではない。14世紀後半の土師器羽釜が出土。

SK4938 SK4936の北にある小さな土坑(0.6×0.5m、深さ0.2m)。12世紀後半の瓦器碗2個が重なった状態で出土し、同時期の土師器羽釜と小皿がともなう。

SK4953 南区東南隅にある東西1.4m、南北1.6m、深さ0.65mの隅丸方形の土坑。埋土上層から12世紀中頃の瓦器碗が出土している。

SK4926 SB4920の東にある不整形の小さな土坑。埋土から鏡片が出土している。

時期	遺構番号	種類	規模／底	桁行 m	梁行 m	底 m	備考
B1期	SB4900	東西棟	7×3 四面	18.4	6.3	南 3.3 他 3.0	
	SB4910	南北棟	5×(2)	12.8			
	SB4920	南北棟	5×2	14.4	5.4		
	SB4930	東西棟	7×3 南	18.4	6.6	2.9	
	SB4940	東西棟	5×2	14.3	6.0		縦柱
	SA4941	東西廻	6以上	13.0以上			SB4940の東にとりつく
	SA4942	東西廻	8以上	17.1以上			SB4940の西にとりつく
	SB4950	東西棟	3×2	8.2	5.0		縦柱
	SA4951	東西廻	1以上	2.6以上			SB4950の東にとりつく
	SA4952	東西廻	1以上	2.6以上			SB4950の西にとりつく
不明	SB4960	南北棟	3×1	4.8	3.5		

第2表 建物・壙規模一覧

III 遺 物

出土した遺物には、土器・土製品、瓦、石製品、鉄製品、木製品がある。大半が土器で瓦がそれにつき、他はごく僅かである。以下、遺物の種類別に記述する。

1 土器・土製品・その他（図版18・19、第9～12図）

土器は、調査区全域から出土したが、その量は調査面積に比して少ない。土器の種類には、大部分を占める土師器、須恵器のほかに、黒色土器、瓦器、施釉陶器が少量ある。土器の時期は古墳時代から中世におよぶが、その大半は、調査区西半部の整地上、およびその下層の遺構から出土した飛鳥時代から藤原宮期直前までの土器である。ほかに、藤原宮期以降の溝や土坑から出土した土器、地山である暗褐色粘質土出土の古式土師器（第12図1・2）などがあるが、今回検出した藤原宮期の遺構にともなう土器はほとんどなく、それ以外の同期の土器もわずかである。土製品等には、墨書き土器、硯、鍛冶関係遺物（坩堝・繩羽口）、埴輪などがある。以下、藤原宮期以前の土器について遺構別に記述し、整地上出土土器、平安時代～中世の遺構にともなう土器、土製品その他におよぶこととする。なお、土器の時期区分・器種名・調整手法等については『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II・『平城宮発掘調査報告』VIIに準拠し、一部新たに設定した。

SK4901出土土器（第9図 1～12） 器種には土師器杯A・杯B・杯C・皿A・鉢・高杯・甕A・甕B・須恵器杯G・杯AIV・鉢・甕がある。飛鳥地域土器編年の第Ⅲ段階（飛鳥Ⅳ段階、以下同様）から飛鳥Ⅳ段階の古い頃に対比される。

土師器 杯A I (4) は底部外面を笠削りし、口縁部に比較的密な笠磨きを施すb₁手法。内面底に螺旋暗文、口縁部に二段放射暗文。口径18.1cm、器高5.5cm。杯CにはC I (3)とC II (1・2) とがある。1・3は底部をナデ調整、2は笠削りであるが、いずれも口縁部の笠磨きを省略し、内面底に螺旋暗文がある。1は口径11.6cm、器高3.3cm。3は口径16.4cm、器高4.8cm。皿A (5) は口縁端部の上面に面があり内側に肥厚する。a₁手法で口径20.6cm、器高2.6cm。甕A (12) の口縁端部は丸く、体部外面下半笠削り、内面はナデ。砂粒を多く含む。口径20.5cm、器高17.0cm。

須恵器 杯Gは宝珠形つまみの蓋がかぶる小型の杯で、蓋 (6～8) のかえりは口縁部より内側にある。口径8.1～9.0cm。7は観に転用している。杯G身には口縁部が直線的な10と丸みのある9とがあり、いずれも底部笠切りのまま。口径9.2～9.9cm。10は器高3.9cm。鉢 (11) は底部をロクロ削りで仕上げ、法量は土師器杯A Iとはほぼ等しい。

SD4905出土土器（第9図 13～17） SD4955から西へ分岐する素掘溝でSD4955より新しい。土師器杯C・杯G・杯H・皿A・鉢A・高杯・巣盞・甕A・甕B・瓶、須恵器杯G・杯H・平瓶・甕・甕・甕など器種は豊富であるが量は少ない。飛鳥Ⅱ段階に対比される。

土師器 杯C I (14) は口径16.8cm、器高5.2cmで a₁手法。底部内面に#状の針書き刻文がある。皿A (15) は外面笠削りののち底部まで笠磨きする b₁手法。口縁端部は杯Cの

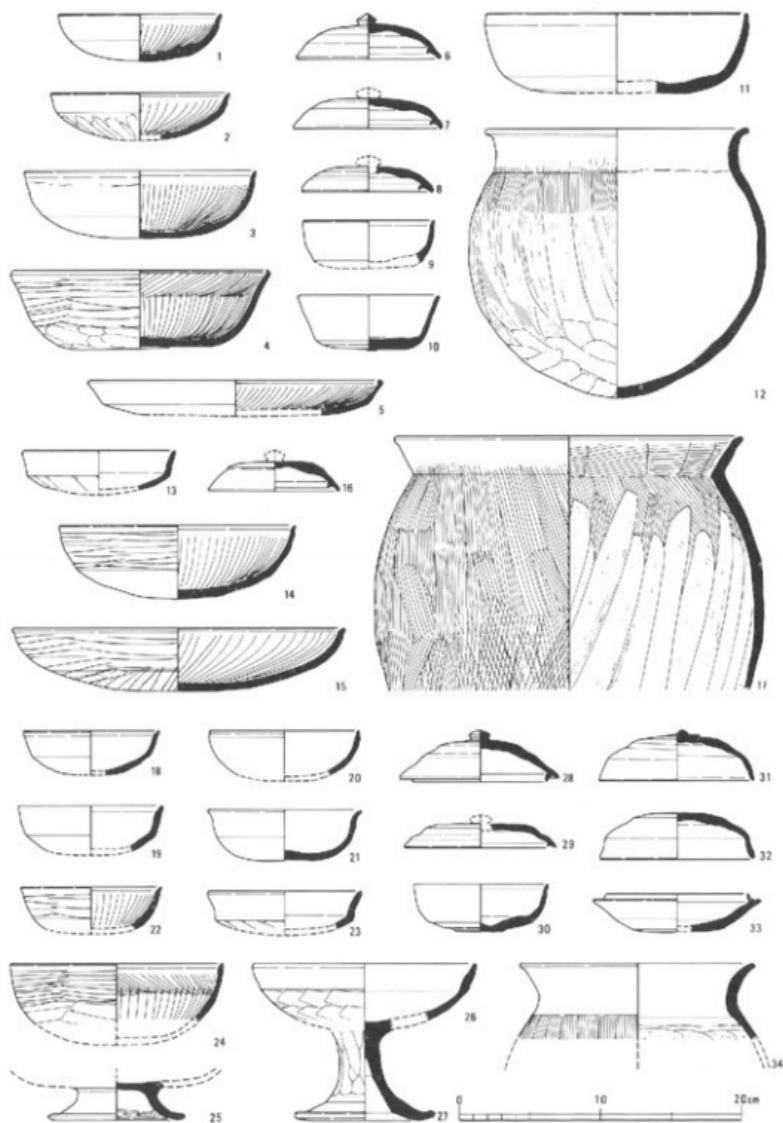
それに似る。口径23.6cm、器高4.5cm。杯HⅢ(13)は口縁部との境に稜をもつ小型の杯でb₃手法。口径10.7cm。甕A(17)は鋭く外反する短い口縁部で、端部には内傾する面をもつ。体部内面は刷毛目ののち上方への範削り。

須恵器 杯G蓋(16)は口径8.2cmでかえりは小さく、つまみを欠く。図示していないが、須恵器には甕や小瓶などの小型の壺類に漆を入れた痕跡のあるものがある。

SD4955出土土器（第9図18-34） 整地土下層を北流する素掘溝で、埋土の灰色砂層から飛鳥Ⅰ～Ⅱ段階に対比される比較的多くの土器が出土した。器種には、土師器杯A・杯C・杯G・杯H・高杯・鉢・甕・甌・瓶・羽釜・壺、須恵器杯G・杯H・椀・高杯・鉢・平瓶・甕・壺・提瓶・横瓶・甌がある。その組成は、土師器では杯C・杯G・杯Hが個体数の半分以上を占めて主体をなし、高杯・甌がそれにつき、ほかはごく僅かである。須恵器でも個体数の約半分を小型の杯類である杯G・杯Hが占めている。杯類の内容は、土師器と須恵器とは2:1の比率となっており、また、土師器杯C・G・Hはそれぞれ調整手法や胎上などを異にする別器種であるが、法量の上では互いに類似し、I～Ⅳの法量による分化がみられる。杯類にみるこの時期の変遷は、須恵器杯類の矮小化と杯Gの増加の傾向、土師器ではa手法の杯Cの増加と磨きの省略の方向にすんでおり、その点で、SD4955と後述のSD4956出土土器は、飛鳥Ⅰ段階の川原寺下層SD002出土土器²と飛鳥Ⅱ段階の標式資料である坂田寺SG100出土土器³との中间に位置づけられる。

土師器 杯CⅠ(24)はb₃手法で2段放射暗文をもつ。口径15cm。(ほかに同手法で口径18cmのものがある。杯CⅡは口径13.2～13.8cm、器高4.3～4.5cmでb₁手法。口縁部近くまで範削りし、磨きを省略したものがある。杯CⅢは口径10.0～10.3cm、器高3.5cm前後でa₁手法。22の磨きは粗い。杯Gは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Iの小塙田宮推定地での土師器杯a類と同じ系譜にある杯で、口縁部を横ナデ調整するほかは不調整、暗文・範磨きは施さない。口縁端部の形状・胎土・色調の違いによって3種に細別できる。杯G a類(21)は端部を小さく外反させた直立気味の口縁で、金雲母を含む細かい砂質土で茶褐色を呈する。杯G b類(18・19)は杯Cに似た比較的精良な赤褐色の胎土で、口縁端部も杯Cのそれに似て小さな面を内側につくる。杯G c類(20)は口縁端部外側に面をつくり内湾する。淡褐色で砂を含む。18は最も小型で口径9.6cm、器高3.1cm。21は口径10.8cm、器高3.6cmで、杯HⅢ(23)と同法量である。高杯には胎土・調整手法の上で、それぞれ杯C・G・Hに対応する器種がある。高杯H(26・27)は杯Hに対応し、中実に作った脚柱の外面を縱方向に削り、内面は円錐形に範でえぐる。脚端部は横ナデで丸く仕上げる。25は杯Cあるいは杯Hに付く脚台で、杯部内面に細かい螺旋暗文がある。脚内面にも螺旋暗文を施す精良な製品。口径9.8cm。甌には口径が23cm前後、16cm前後、10cm前後の大小3種がある。34は中型の甌で口縁端部を丸く仕上げ、体部内面を範削りする。大型のものに口縁端部を上方に突出させ、外側に面をもつものがある。

須恵器 杯Hは蓋の口径が10.6～10.8cmで、頂部を範削りするもの(32)と範切りののち



第9図 出土土器実測図 I

にナデ調整するもの（31）とがある。杯H身は口径11cm前後でかえりは短く、底部を箇切りのちナデ調整するもの（33）が主体を占める。杯Gは身口径9.4～10.5cmのものがあり、10cm前後が主体。調整では底部を箇切りのちナデのもの（30）が多く、ロクロ削りのものもある。杯G蓋は口径9.3～10.5cmで、最も大きい28はかえりの端部が口縁よりも突出し、乳頭状の名残りを留める小さな宝珠形のつまみがつく。

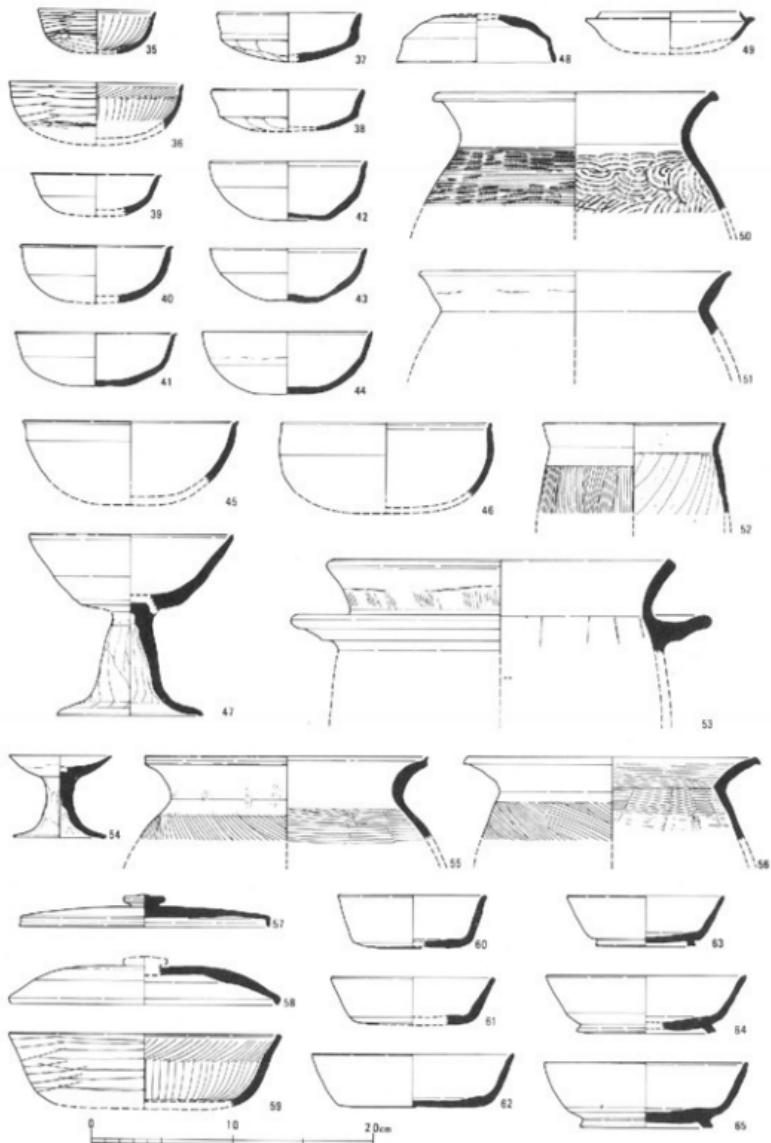
SD4956出土土器（第10図 35～53） SD4955の西を北流する素掘溝で、炭混じり暗褐色土の上層と灰色砂の下層とに分れ、土器はおもに上層から出土した。下層の土器も上層の土器と差異がなく、また、北区に点在する溝状の不整形土坑もこの溝の名残りであり、互いに接合する個体もあることから一括して扱う。器種には土師器杯C・杯G・杯H・鉢・高杯・瓶・羽釜・壺A・壺B・須恵器杯G・杯II・高杯・平瓶・壺などがある。SD4955よりもやや古い様相をもち、飛鳥I段階の新しい頃に位置づけられる。

土師器　杯Cは法量によりⅠ～Ⅲに分れる。いずれもb₁手法で磨きを密に施す。CⅠ・CⅡ（36）には二段放射暗文があり、36の口径は12.4cm。杯CⅢ（35）は口径8.5cm、器高3.1cm。杯G（39～46）はSD4955出土品と同じく、a類（39～42）、b類（43～46）、c類の3種に分れる。また、杯Gには細別をこえて、杯GⅠ（口径15～18cm、45・46）、GⅡ（11～12cm、40～44）、GⅢ（9.0～9.3cm、39）の法量分化がある。杯GⅡには灯火具に使用されたものがある。杯Hにも法量による分化があり、37・38は口径10.2～10.8cm、器高3cm前後でHⅢにあたる。高杯G（47）は杯Gに対応する高杯で脚を横ナデ調整でつくり端部を小さくつまみ出す。これは、杯Cに対応する高杯には脚内面にしばり目と指おさえがみられ、外側が平滑なのと異なる特徴である。杯部は平らな底部からまっすぐに開き、内外面とも横ナデである。口径14.5cm、脚径10.3cm、器高12.8cm。壺Aには口径が24cm前後、20cm前後、13cm前後のものがある。小型の52は、端部上面に面をとる直線的な口縁で体部は外側に細かい刷毛目、内面は上方に箇削りする。大型の壺には口縁端部を丸くおさめるもの（51）のほかに外側に面をつくるものがある。羽釜（53）は縱方向の刷毛目のち大きな鋸をつける。暗褐色で雲母を多量に含む。口径22cm。

須恵器　土師器に比べて量、器種ともに少ない。杯Hは口径11cmあまりで浅く、蓋（48）の頂部はロクロ削り。身（49）には低いかえりがつき、底部を箇切りのちナデ調整したものが多い。杯Gは口径11cmたらずで、底部は箇切りのままである。壺（50）は土師器壺に似た器形で、口縁端部の形状も異例である。

SD4957出土土器（第10図 54～56） SD4956を埋めた後に掘られた東西石組溝。器種には土師器杯C・杯G・鉢・小型高杯・壺・瓶、須恵器杯II・平瓶・壺などがある。量的には少ないが、SD4955とはほぼ同じ内容をもつ。小型高杯（54）は脚径6.7cm、器高5.8cmで、口径9.8cmの小さな杯部は全面ナデ調整。暗文や磨きはない。大型の壺（55・56）には口縁端部に面をつくる多様なものがあり、小型壺の口縁は丸くおさめる。

整地土層出土土器（第10図 57～65） 調査区西半の整地上層から出土した比較的多量の



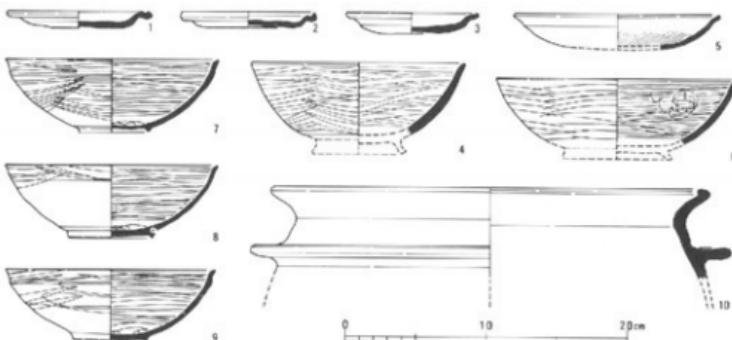
第10図 出土土器実測図 II

土師器・須恵器の大半は、下層遺構出土品と同じ内容の土器であり、ほかに、主として整地土上部から飛鳥IV～V段階の土器が少量出土した。後者は、整地土層を切り込む建物遺構の造営年代の上限を示す重要な資料で、それらには土師器杯A I・蓋、須恵器杯A (60～62)・杯B (63～65)・杯B蓋 (57・58)・長頸壺などがある。土師器杯A I (59)は口径18.8cmで口縁端部は内側にわずかに肥厚する。a: 手法で内面には二段放射暗文、底部に螺旋暗文。飛鳥IV段階に属す。須恵器杯Aはいずれも底部をロクロ削りで仕上げるが、60は形態・法量のうえで新しい傾向にあり飛鳥V段階に対比される。杯Bの高台はやや低いが外方へ踏ん張っており、63は口径11cm、器高3.5cmで、灯火具に使用されている。杯B I 蓋 (57)は杯蓋転用硯である。飛鳥V段階に属す。

SD4915出土土器（第11図1～4） 西脇殿SB4920の柱穴の上を北流する素掘溝。埋土の粗砂層から土師器杯A・小皿、黒色土器碗Bが出土した。小皿（1～3）は口縁が手かぎ状に屈曲し、口径9.3～9.8cm、器高1.1～1.3cm。黒色土器碗B（4）は全面漆黒色の黒色土器B類で、外面に針書きがある。小皿の形状から10世紀末から11世紀初頭に位置づけられる。SD4916・4917、SK4927からも同時期の土師器が出土している。

SD4958出土土器（第11図5・6） 南区中央の東西素掘溝で、粗砂層から土師器杯A・皿A、黒色土器A類の碗Bが出土した。皿A（5）は口径14.4cm、器高3.6cmで、内面に刷毛目が残る。黒色土器碗B（6）の外面の磨きは粗く、内面には密な磨きの上に螺旋状の花文をつける。口径16.8cm。土師器皿にc手法がみえないことから、平城京SD650Bより新しく、10世紀前半に位置づけられる。土師器杯Aの底部に文字を針書きした破片（図版19、第12図4）があるが、判読できない。

SK4953出土土器（第11図7・8） 瓦器碗5点があり4点が完形である。外面の磨きに粗密があるが、口径14.6～15.0cm、器高5.2～5.3cmで、断面三角形の高台がつく。大和型瓦器の川越幅年II-Bの古い段階に対比され⁴、12世紀中頃に位置づけられる。



第11図 出土土器実測図 III

SK4938出土土器（第11図 9・10） SK4936の北にある小土坑で、重ねられた2点の瓦器椀と土師器羽釜（10）が出土した。瓦器椀（9）は口径14.3～14.8cm、器高4.9cmで、川越編年のⅡ-Bに対比され12世紀後半。

SK4935・4936出土土器 SK4935・4936は牛の鼻木の出土した土坑で、SK4935からは底の盛り上がった小皿と瀬戸焼のおろし皿片が、SK4936からは薄手で硬質の土師器羽釜が出土し、ともに年代は14世紀後半とみられる。

墨書き土器（図版19、第12図3） 須恵器杯Bが1点ある。墨書きは底部外面の中央にあり、「衣女」と読める。土器は比較的高い高台が内寄りにつき底部は窓切り。飛鳥IV段階かV段階に対比される。「衣女」は古代の女性名であろうか。

硯（図版19） 前述した杯蓋転用硯と円面硯がある。円面硯は脚部の破片で、幅2cmの切り込みで多脚をつくる。下底径25.6cm、18脚に復原できる。整地土層出土。

鍛冶関係遺物（図版19、第12図5・6） 埋堀、輪羽口、鉱滓が整地土層、SD4955・4956から出土し、その作業台に使用されたと思われる榛原石の板石が伴出している。

埋堀（第12図5・6）は口径13cmほどの楕形で内面は焼けただれて白灰色に変色する。榛原石の板石は周囲を敲いて長方形に整える。全形のわかる例（図版19）では長辺36cm、短辺18cmで、一方の面が火炎を受けて黒変し、そこに赤色の付着物がある。

埴輪 円筒埴輪と不明形象埴輪がある。円筒埴輪には粗い横刷毛目で黒斑のある5世紀中期のものと、6世紀初頭のものとがある。日高山山上と北方とで出土した埴輪群と時期的には同じであるが、埋没した経緯は異なるものと考えられる。SD4955・4965出土。

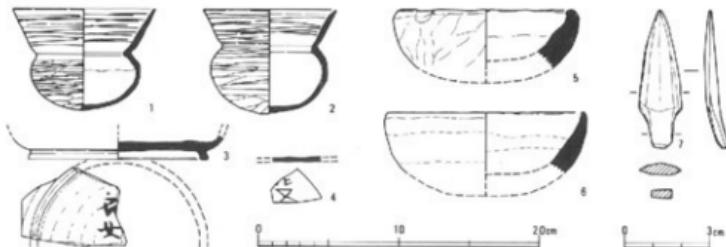
金属製品 SK4926出土の鐵製箇（図版19、第12図7）がある。全長4.9cm、幅1.5cmである。SK4926からはこれのみが出土し、時期は不明。

1 須恵器杯G蓋、杯口身などかえりのある器種の口径は、それらに組み合う身や蓋のあたる部分での直径で記した。

2 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」10、1980。

3 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」3、1973。『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II、1978。

4 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」「文化財論叢」1983。



第12図 出土遺物実測図

2 瓦

瓦は溝、土坑、柱抜取り穴などの遺構や整地層のはか、それらを覆う包含層から少量出土し、整理箱で5箱分ある。軒丸瓦と道具瓦の小片が数点あるほかは、丸瓦と半瓦が多数を占める。記述にあたっては、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を用いる。

軒丸瓦 4型式4種、各1点がある。6275I・6276C・6279Aは藤原宮所用の複弁8弁蓮華文軒丸瓦で外区内縁に珠文、外縁に線鋸齒文をめぐらす。6275Iは中房に1+4+8の蓮子を配し、調査地に隣接する日高山瓦窯の製品である。6276Cは中房に1+5+9の蓮子を配す。生産地は特定できないが、乳白色を呈する緻密な胎土の特徴から奈良県五条市周辺で作られたものと推定できる。6279Aは中房に1+8の蓮子を配す。日高山瓦窯で生産されたものであるが、胎土に多量の砂粒を含み、瓦当裏面に横方向のナデ調整を施す点から、この瓦窯での最終段階の製品と推定できる。このほかに面違鋸齒文縁をめぐらす複弁8弁蓮華文軒丸瓦があり、川原寺創建時所用の軒丸瓦601Cと同范の可能性が強い。范がかなり消耗している点や、胎土の特徴は同じく同范の和田庵寺出土例に酷似する。

道具瓦 日高山瓦窯産の丸瓦を分割して製作した両戸瓦1点と、おなじく日高山瓦窯産の半瓦を分割して製作した熨斗瓦2点がある。

丸・平瓦 丸・平瓦は小片を除くと全部で313点あり、丸瓦が128点、平瓦が185点ある。丸瓦のうち112点(87.5%)はその製作技法や胎土の特徴から日高山瓦窯産であることが確認でき、のこる16点(12.5%)がそのほかの生産地のものである。おなじく平瓦のうち141点(76.2%)は日高山瓦窯産で、のこりの44点(23.8%)がそのほかの生産地の製品である。日高山瓦窯産の丸・平瓦のなかには焼けひずんだもの、高熱により破片が融着したもの、破面に2次的に火を受けたものなどがあり、大部分が日高山瓦窯の灰原に捨てられたもので、西南坪の整地にともなってこの地に移動したものと推定される。一方、そのほかの生産地の丸・平瓦は、御所市と高取町の境界にある高台・峰寺瓦窯などから藤原京にもたらされたものである。その出土位置を検討すると、正殿SB4900と西脇殿SB4920の柱抜取り穴から大型破片がまとまって出土していることが目につく。点数が少なく断定はできないが、これらの瓦は内郭の建物の棟などに使用されていた可能性も考えられる。なお、このほかに、7世紀前半から後半にかけての丸・平瓦がごく少量ではあるが認められた。

3 柱根・木製品 (図版19, 第13図1~4)

正殿SB4900、および後殿SB4930から柱根が12本出土した。この柱根のうち5本は正殿北面の庇と、後殿広縁の床束である。SB4900・4930身舎の柱根はヒノキ材で直径は23~25cmであり、藤原宮内の殿舎や、京内官衙と考えられる左京六条三坊の主要な建物の柱の直径が30cm前後であるのに比較してやや細い。後殿に用いられた柱根には、その基部に文字が刻まれたものがある。1は「木」、2は下端を天として「□木久口□木」である。加工と調整の痕跡からみると、最初に文字が刻まれ、ついで手斧でハツリ調整し、最後に後穴を開けていることから、この文字は伐採地またはその付近で刻まれたが、木材を搬出する

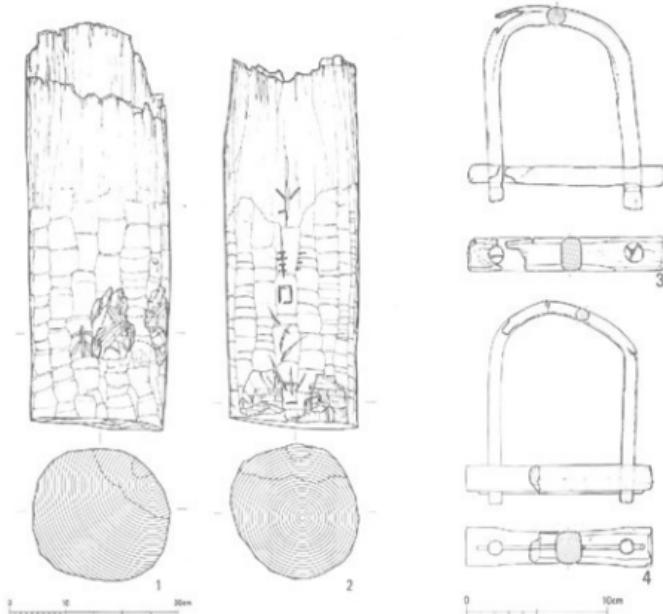
るときには不用となっていたと推定される。なお木口下端の整形は、1が手斧ハツリであるのに対し、2は鋸で切る。2については箇穴と鋸で切断した木口面との間がきわめて近いことから、建築現場で切りそろえられたものと考えられる。

木製品には鼻木と曲物がある。鼻木とは牛の鼻の孔に通す環状の木で、土坑SK4935から2点、SK4936から1点が、14世紀後半の土器片や牛の骨とともに出土した。SK4935の場合は共伴した牛の歯の数から、2頭の牛が鼻木をつけたまま埋められたことが知られる。鼻木はヒノキの細い枝をU字形に曲げ、これにカシのはめ木をはめ、さらにその両端部をとめ木で固定する組み合せ式のものである。3はさらにU字形に曲げた部材の両端木口に小さな楔を打ち込み、また4は、はめ木の中央部分の幅をやや狭めている。鼻木の寸法は3が内側で長さ10cm、幅8.5cm、U字形の部材の直径は1.3cm、はめ木の長さは復原で14cm、幅2.4cm、厚さ1.4cmである。なお、大阪府大畠南遺跡からほぼ同形の鎌倉時代の例が、また、二又の枝を利用した例が草戸千軒町遺跡から出土している¹。

曲物は、藤原宮期の土坑SK4970の底に側板だけ据えられていたものであるが、遺存状態が悪く取りあげられなかった。長径60cm、短径35cm、高さ約5cmである。

1 柏原市教育委員会『大畠・大畠南遺跡』柏原市文化財概報1983-Ⅲ、1984。

広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡-第11~14次発掘調査概要-』1976。



第13図 出土柱根・木製品実測図

IV まとめ

今回の調査では、第19次調査の結果から予想されたとおり、坪の中軸線にそって左右対称にならぶ正殿や後殿、脇殿、門などの建物を検出し、右京七条一坊西南坪の利用形態をほぼ解明するという成果がえられた。この成果は、西南坪が1町規模の宅地として利用されていたことの確認と、その内郭の建物配置を明らかにしたという2点に要約でき、京内における宅地のありかたを解明していく上で、その意義はきわめて大きいといえよう。以下、この2点を中心簡単にまとめておく。

1 条坊復原と西南坪の規模（第14図）

西南坪周辺の条坊遺構については、第17・19・23次調査で、朱雀大路、推定西一坊間路、七条条間路SF2031などを検出しておらず、坪の東と北を画す条坊については一応の手がかりがえられている。しかし、坪の西を限る西一坊大路は今回の調査範囲外にあり、また、南を限る七条大路は一応範囲内にはいるものの、今回の調査では関連遺構は検出されず、正確な条坊復原は今後の課題である。また、東南坪には藤原宮所用の屋瓦を生産した日高山丘窯跡群が存在する丘陵があり、この付近では条坊道路が計画どおりに施工されていなかったのではないかなど、疑問とすべき点も多い。以上のような制約はあるが、ここでは、これまでの調査成果と、今回検出した坪の内外を画す堀や建物の位置にもとづき、まず条坊復原と西南坪の規模について検討する。

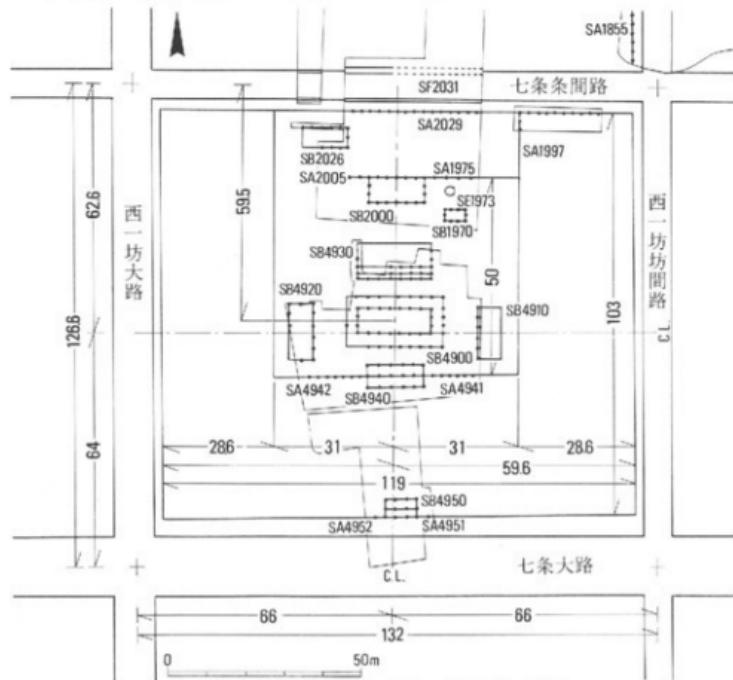
第19次調査の報告で指摘されているように、SB2000は坪を東西に二分する中軸線上に位置すると思われるが、SB2000と今回検出したSB4900・4930・4940・4950の建物心をつなぐと、SB4950とSB4940を除く3棟の建物は、ほぼ一直線をなす中軸線上に正しく配置されていることが判明した。この中軸線は、国土方眼方位に対して北でわずかに東へ振れており、ほぼ真北を指していると考えられる。この中軸線から推定西一坊間路の道路心までは66m、また推定西一坊大路心も中軸線から西約66mに計算上もとめられ、上記3棟の建物は西南坪の中軸線上にほぼ正しく配されていることがわかる。一方、西南坪の北を限る七条条間路SF2031の道路心からSB4900の建物心までは59.5m、身舎南側柱列までは62.6mである。また、計算上もとめられる七条大路心からSB4900身舎南側柱列までは64mであり、SB4900の身舎南側柱列は、ほぼ西南坪の南北の $\frac{1}{2}$ 分割線上に位置するとみられる。したがって、西南坪をとりかこむ各道路心からもとめられる坪の東西の規模は132m、南北の規模は126.6mとなる。

一方、西南坪をとりかこむ外郭施設から坪の規模を復原すると、次のような数値がえられる。今回検出した西南坪の南を限る東西堀SA4951・4952の軸線は、東で北へ 2° 以上の振れがある。一方、第19次調査で検出した北限の東西堀SA2029はほとんど振れがなく、両者は必ずしも平行しないが、中軸線上でのその南北規模は103mとなる。東西の規模は、西北坪の東を画す南北堀SA1855の南への延長線上に堀があると仮定すると、中軸線から

東へ59.6mの位置に東限の塙が想定でき、これを西へ折り返すと、推定西一坊大路心の東約7mの位置に西限の塙が想定できる。したがって、西南坪の東西規模は約119mに復原でき、坪の実質上の面積は12,257m² (3,714坪) となる。西南坪の規模は以上のように復原され、四周には外郭施設として一本柱塙がめぐり、七条大路に面して南門SB4950が開き、さらに西一坊大路に面する西門の存在も想定される。

2 内郭と各外郭の規模

坪内を区画する施設としては、今回の調査で中門SB4940とその両妻柱にとりつく東西塙SA4941・4942を検出し、第19次調査でSB2000の北側柱筋にとりつく東西塙SA1975・2005と、北限の塙SA2029にとりつく南北塙SA1997を検出している。中軸線からSA1997までは31mあり、内郭の東西規模は62mとなる。南北規模はSA1975・2005とSA4941・4942の振れがわずかに異なるが約50mに復原できる。一方、東西外郭と南外郭が一体として利用されていたのか、あるいは区画されていたのかは不明であるが、一応、東と西外郭の規模は南北66.5m以上、東西28.6m、南外郭の規模は南北36m、東西62m以上に復原できる。なお、北外郭の規模は南北16.7m、東西62mである。



第14図 西南坪古地概念図 単位m、細部の数値は概算値

3 内郭の建物配置

内郭には中軸線上に南から掘立柱建物SB4940・4900・4930・2000が並び、SB4900の東西にSB4910・4920、SB2000のまわりにSB2026・1970、井戸SE1973が配される。それぞれの建物の性格は次のように考えられる。

坪のはば中央に位置するSB4900は、7間×3間の身舎のまわりに広い庇をめぐらす大規模な建物で、正殿にふさわしい規模と構造をそなえている。床束らしき遺構を検出していないが、身舎内はおそらく床を張り、庇部分は上間として利用したものであろう。両脇殿とともに、公的な生活空間としての用途が考えられる。SB4930は、正殿とその妻柱筋をそろえ、7間×3間の身舎の南に広縁を張った庇を有する、後殿にふさわしい奥行きのある建物である。正殿との間は実質的には約4m（正殿北庇軒と後殿南庇軒間の距離）しか離れておらず、両者の用途に密接な関係があったことを示している。私的な生活空間としての用途が考えられよう。東脇殿SB4910は正殿の身舎東側柱筋から約12m東にあり、その北妻は正殿の北側柱筋にはばそろえる5間×2間の南北棟に復原できる。一方、西脇殿SB4920は正殿の身舎西側柱列から約11.5m西にその東側柱列があり、その北妻は正殿の北側柱筋よりやや北に寄る5間×2間の南北棟である。両脇殿の位置と規模は、厳密には正殿をはさんで左右対称ではなく、規模も西脇殿のほうがその柱揚形も含めてやや大きいというわずかな違いがあるが、正殿の内側面から前面にかけてほぼ同規模の脇殿をおくという、典型的なコの字型建物配置を示している。

SB4940とSA4941・4942は内郭の南辺を画す中門と堀であるが、いずれも正殿および両脇殿に近接して建てられていることを特色として指摘できる。中門と正殿との実質的な間隔は約4mしかなく、東脇殿と堀の間隔は4.5m、西脇殿と堀の間隔も4.3mである。したがって、正殿の周囲には実質的に庭園とよびうる空間は存在せず、中軸線にそった南外郭が、広い空閑地として残されている状況と好対照をなしている。また、中門の桁行規模が5間と大きく作られていることも特色の一つに数えられる。

中軸線上のもっとも北に位置するSB2000は6間×3間の東西棟で、後々殿とよぶべき建物である。しかし後殿とは約10.5m離れており、また、東妻柱から約5m東に井戸SE1973があることなどから、正殿や後殿とは一線を画した空間と考えられる。井戸の南の小規模な東西棟SB1970や、SB2000の西北にある東西棟SB2026も、同様に日常生活を支える建物と思われ、この一画は厨と推定できる。

4 西南坪の遺構の性格

西南坪の内郭では、中軸線上に正殿と後殿・後々殿がならび、正殿の両側に東西脇殿を整然と配した建物配置が明らかになった。このような配置はコの字型建物配置の一類型として把握できる。近年コの字型建物配置を示す遺構については、平城・平安両京における8～9世紀の例が二、三調査され、その性格についても「京内官街」か「貴族の邸宅」かをめぐる議論がある。しかし、最近の研究によれば、次の3つの要素によって官衙か邸宅

かを区別しうる可能性があるという¹。この3つの要素とは、①脇殿の正殿に対する位置が前面か側面か、②正殿と脇殿の桁行規模の大小、③脇殿が庇つきの建物であるか否か、である。そして、脇殿が正殿の側面にあり、脇殿の桁行規模が正殿より小さく、かつ庇つきの建物である場合は邸宅である可能性が強く、さらに邸宅の場合は、後殿の存在とその両側にまた脇殿を配した二重コの字型の建物配置も指摘されている。

そこで、この3つの要素を西南坪の遺構にあてはめて考えてみると、まず、脇殿と正殿の身舎北側柱筋はほぼそろっており、脇殿は正殿の側面に位置する。また脇殿は身舎の桁行規模7間に対して5間と小さい。一方、脇殿は身舎のみで庇がつかないという相違点もあるが、後殿が存在するという特色もかねそなえている。今回は、二重コの字型の建物配置であるか否かは調査できず、また中門の規模が大きい点や、南外郭の利用形態などに若干の疑問点を残し、京内官衙とみる可能性が全くないわけではない。しかし、以上の諸要素を勘案すれば、現時点では西南坪の建物群を1町規模の邸宅として積極的に評価した方がよさそうなことも、また事実であろう。

「日本書紀」持統天皇五年（691）十二月乙巳条には、右大臣以下、無位に至るまでの貴族と官人に「新益京」の宅地を班給した記事がある。その規定によると、右大臣は4町、直廣貳（従四位下）以上は2町、直大參（正五位上）以下は1町、勳（正六位上）から無位に至るまでは戸口の数にしたがって、上戸に1町、中戸に半町、下戸に四分之一町が班給されたことが知られる。試みに「日本書紀」と「続日本紀」から、1町の宅地を班給されうる有資格者を拾い上げると、諸王から有力氏族までおよそ170人もの名が見える。また大宝元年（701）三月の大宝律令施行に際して新しい位号に改め叙位された者のうち、1町以上の宅地を班給されうる五位以上の数は諸王14人、諸臣105人の計119人であったという。現段階では、残念ながらその中から居住者を特定することはできないが、調査地は藤原宮南面大垣から約300mの位置にあり、南面西門から南へのびる西一坊大路と、七条大路に面したこの地は、京内において最も上級の宅地の一つであったと考えられるのである。したがって、史上に名をとどめる貴族の邸宅であった可能性はかなり高いといえよう。

藤原京においては、部分的な調査でおお断定はできないものの、このほかに右京三条三坊東南坪や、左京二条三坊西南坪でも1町規模の土地利用が推定されている²。また、左京六条三坊では、4町規模の京内官衙の存在も確認されつつある³。藤原宮の大垣に面した計20の坊は、京内における一等地として格づけられ、そのうちのあるものは左京六条三坊のように4町規模の京内官衙として、あるものは2町規模の、またあるものは今回調査した右京七条一坊西南坪のように1町規模の邸宅として利用されていた可能性があろう。宮周辺における坊内の、より計画的な調査の進展と保存が今後に期待される所以である。

1 山崎直「京におけるコ字型建物配置遺構の性格」『森雅志先生頌別記念 考古学叢考』に収録予定。

2 「右京三条三坊・二条三坊の調査（第39・43次）」・「左京二条三坊の調査（第41・43次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』15、1985。

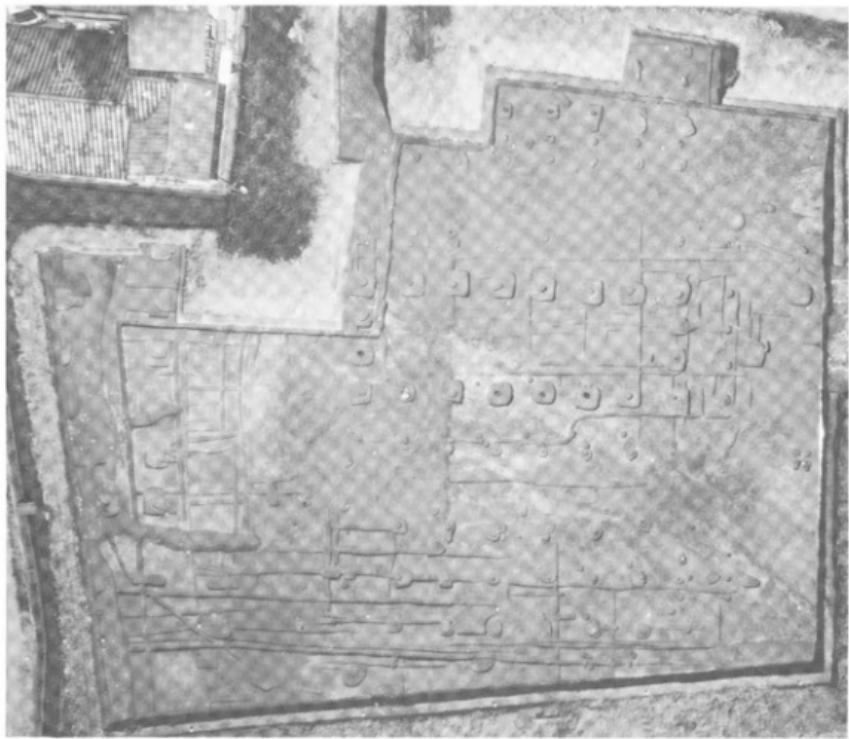
3 「左京六条三坊の調査（第45・46次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』16、1986。



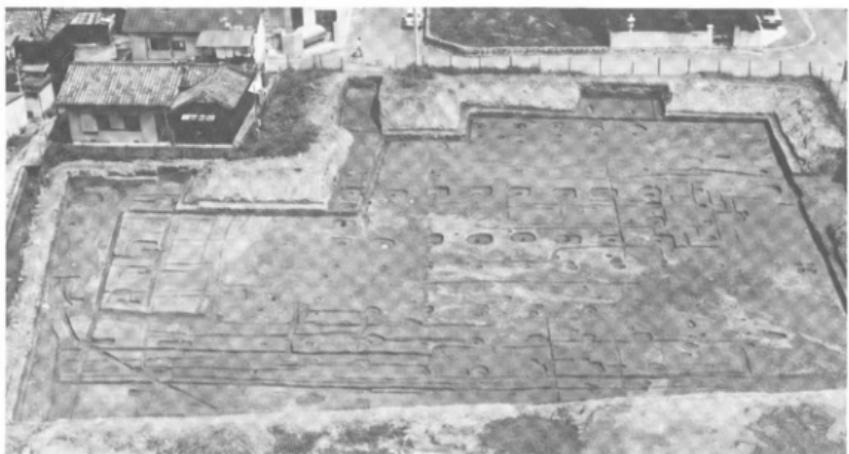
造構図版撮影方向

図 版

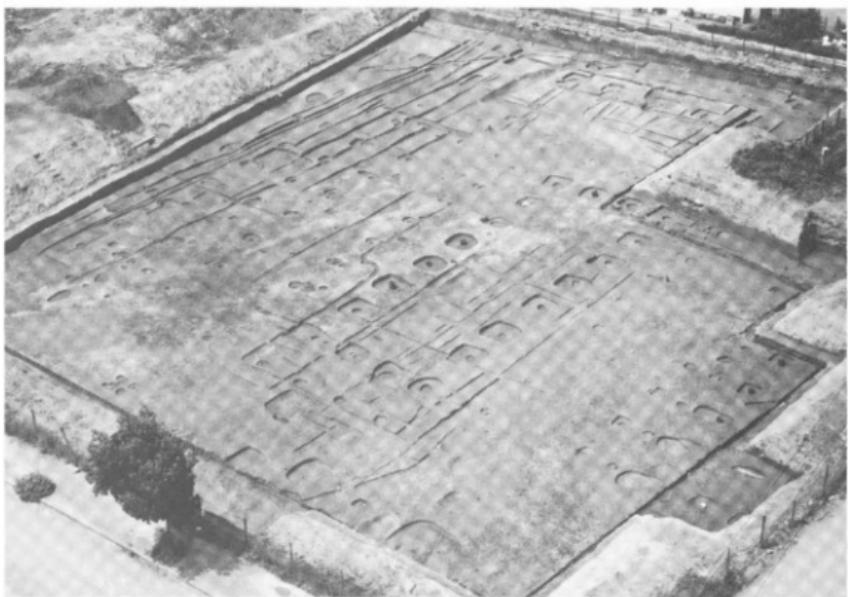




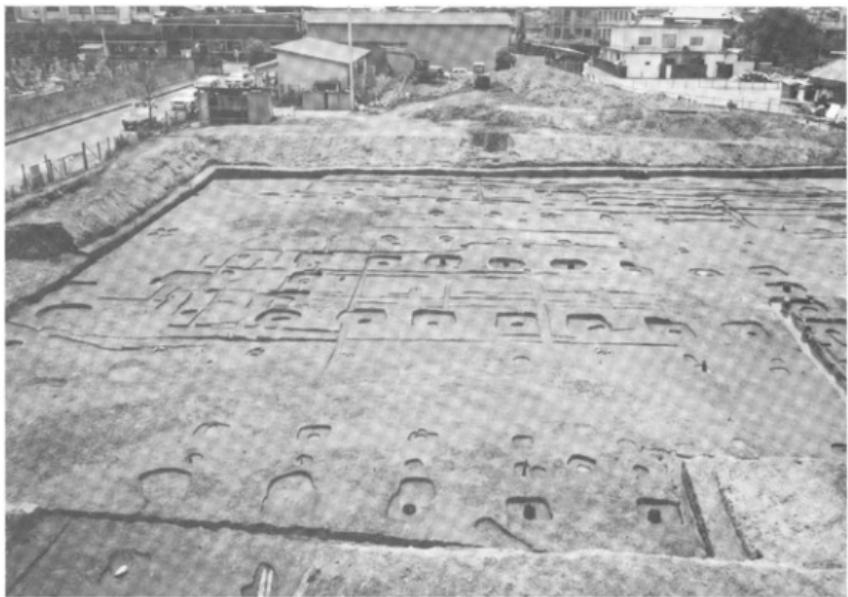
2 北区航空写真



3 北区全景 南から



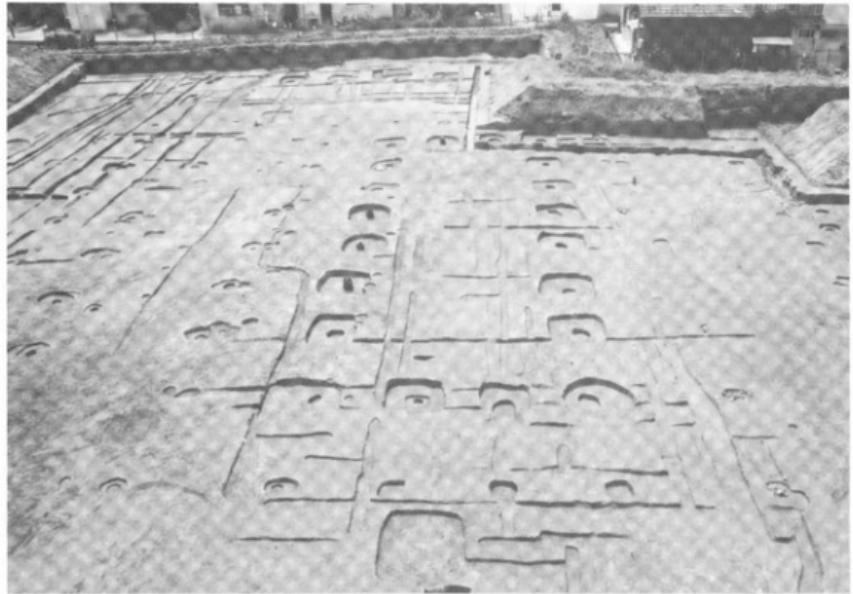
4 北区全景 北東から



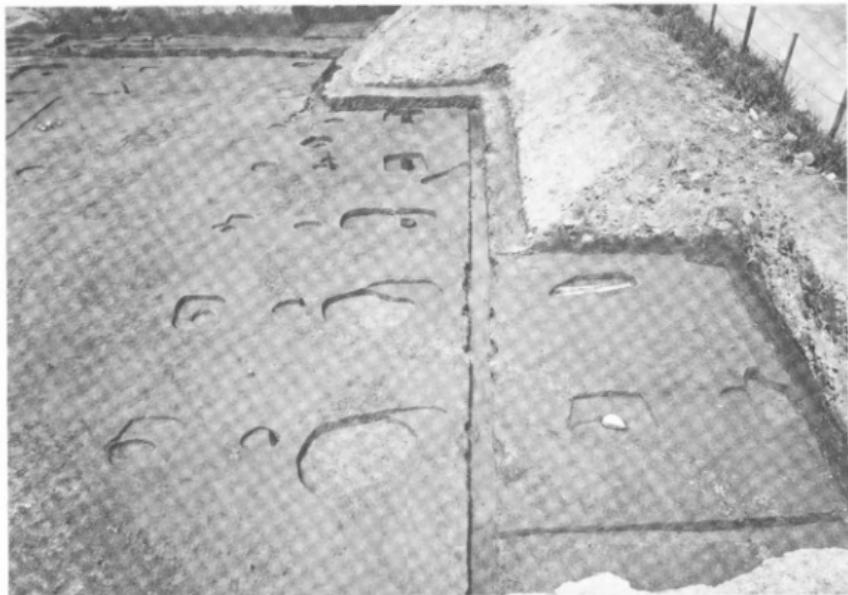
5 北区全景 北から



6 中門SB4940・正殿SB4900 南から



7 正殿SB4900 東から



8 後殿SB4930 東から



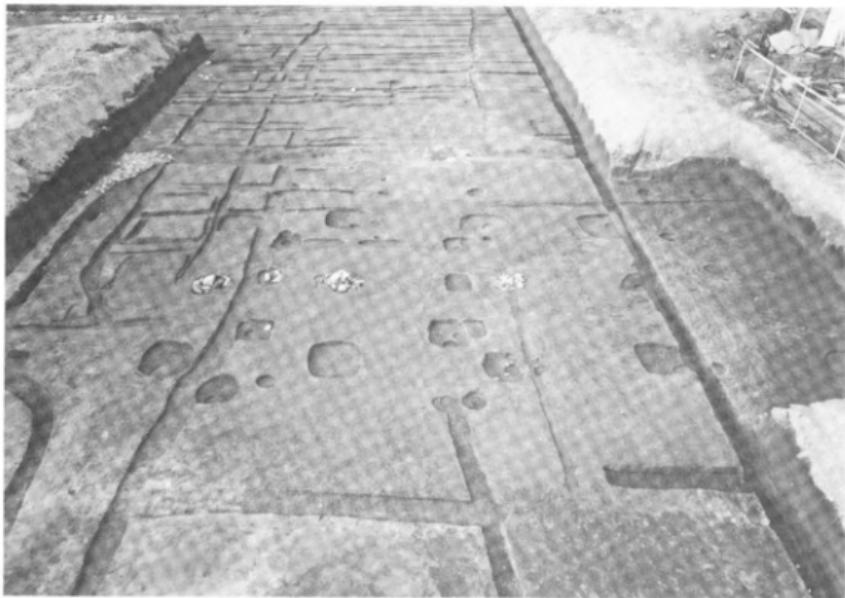
9 東脇殿SB4910 北から



10 西脇殿SB4920 南から



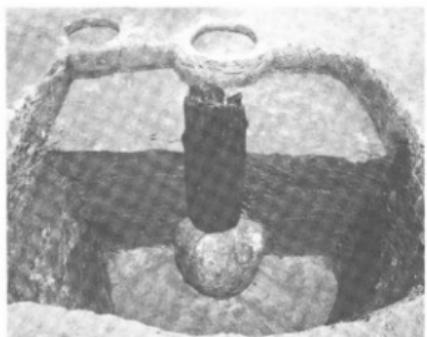
11 東西塀SA4942 東から



12 南門SB4950 南から



13 南区西半全景 東から



14 正殿SB4900柱掘形 南から
16 後殿SB4930柱掘形 西南から



15 西脇殿SB4920柱掘形 北から
17 土坑SK4935 南から



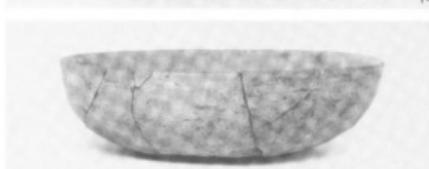
1



14



6



3



10



4



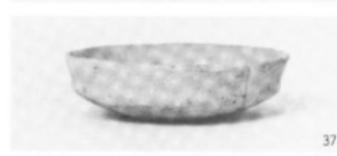
63



58



35



37



27



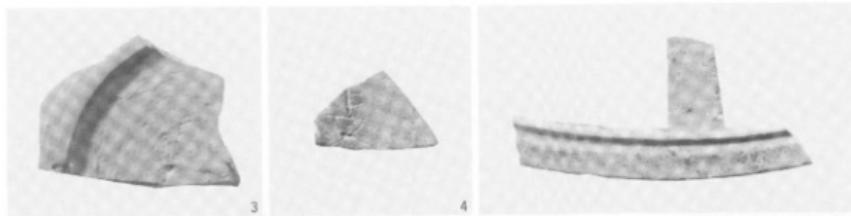
42



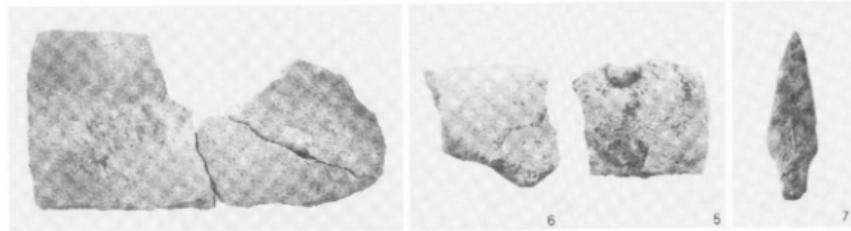
47



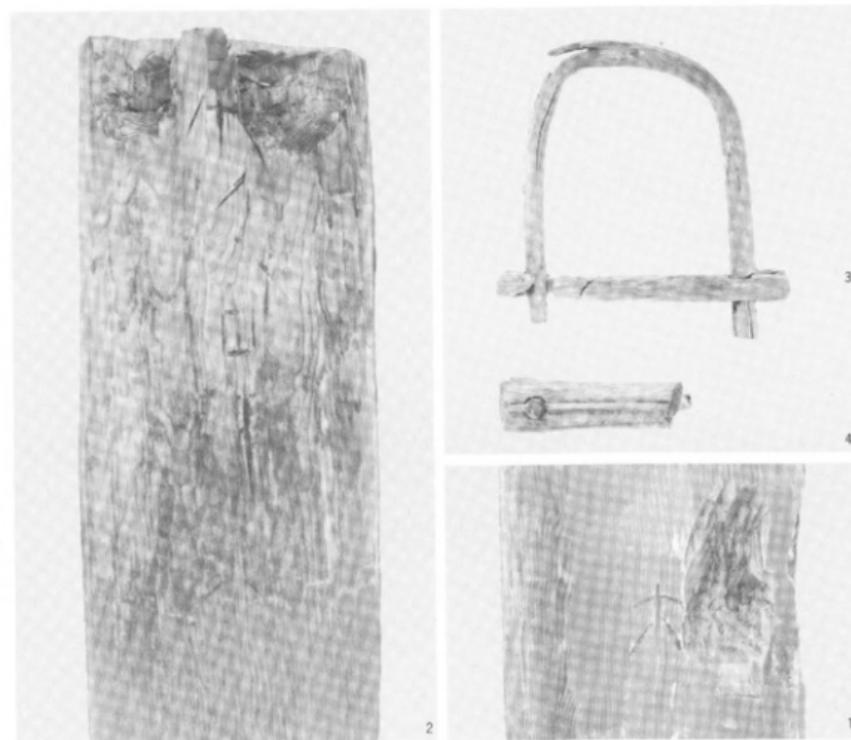
44



墨書土器・針書土器・瓦



標原石・坩堝・鉛



1
鼻木・柱根刻字

藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告

1987年3月25日発行

編 集 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2-9-1
TEL.0742-34-3931(代)

発 行 藤原京右京七条一坊発掘調査会
印 刷 共同精版印刷株式会社

